静岡労研ニュース NO. 113 2020 年 8 月 静岡県労働研究所

◎第 150 回定例研究会　　7 月 16 日（木）　　於：Zoom 及び国労会館

津久井やまゆり園殺傷事件から日本の社会構造を考える

佐々木隆志氏（静岡県立大学短期大学部教授）

●津久井やまゆり園殺傷事件とは

相模原障がい者殺傷事件（津久井やまゆり園）とは、2016 年（平成 28 年）7 月 26 日未明、神奈川県立知的障がい者福祉施設「津久井やまゆり園」に植松聖（元施設職員）が侵入し、持っていた刃物で入所者１９人を刺殺、入所者２６人に重軽傷を負わせた戦後最大の事件です。

●相模原殺傷事件へのアプローチ

事件の特徴としては、犯人の植松が①施設の職員であること、②事件後、反省していないことであり、彼は「殺したのは人間じゃない」とまで言っています。私がこの問題に関わる動機としては、①終末ケア研究者の立場、②施設職員養成の立場、③障がい者の親の立場の三点があります。

●事件が社会に与える影響

植松の手記をまとめた本が出版されると知った時、私は出版差し止めを要望しました。その理由は第二の植松を出してはいけないということです。予備軍は山ほどいるのです。本が出版され、植松の偏見が社会に出ることにより、次のような危険があります。①遺族、障がい者の不安増大、②新たな事件に発展する危険、③障がい者を取り巻く環境が悪化すること等です。私の三男で障がいを抱える息子は、この事件がテレビで報道されてから「植松が殺しに来る」と怯えていました。

●植松の思考

留置場で植松に面会して質問しましたが、「やまゆり園に勤めていなければ、この事件は起こさなかったのでは？」との問いに対する彼の回答は「１２０％ない」ということでした。また「なぜ殺したのか？」という質問に対しては、「目立ちたいから、一人二人では目立たない、１０人以上殺さないと」と答えました。植松の供述の中で注目する点があります。それは「利用者がプールで溺れそうになった」とき、「その利用者を助けた」が、しかし「感謝されなかった」というものです。植松は国会（議長）に障がい者を殺傷することを言いに行きましたが拒否されました。そして拒否されたことによって、殺傷の想いがより強くなった可能性があります。

●事件の背景

植松は障がい者施設に就職しましたが、施設に勤務後、現在のような考えを持つようになりました。彼が目指したのは「大麻解放永遠平和」と書いています。障がい者施設で働くために必要なことは、①自己の福祉感の形成で、これが最も重要です。次に②社会福祉の専門的な技術、③社会福祉の専門的な知識となります。

●イギリスの場合

イギリスに障がい者の調査で行ったことがありますが、障がい者が町の中で一緒に生活しています。差別をなくすには、障がい者と関わることによって、理解を深めることが重要です。本当の福祉は本当の優しさを伝えていくことです。

●おわりに

もし日本に死刑制度がなければ植松は出なかったでしょう。彼には死刑よりも無期懲役の方が怖いのです。障がい者の親として息子と接してわかったことは、障がい者の子供は変わらないということです。したがって、親や対応する人が変わるしかないということです。命が大事で差がないことを、教育、社会で教えていかないといけないと思います。

＊連絡先：〒420-0851　静岡市葵区黒金町 55 番地　静岡交通ビル 3 階（静岡県評内）
静岡県労働研究所　　TEL　054-287-1293　FAX　054-286-7973
メール roudouadv@wave.wbs.ne.jp ホームページ http://shizuokarouken.sakura.ne.jp/index.html